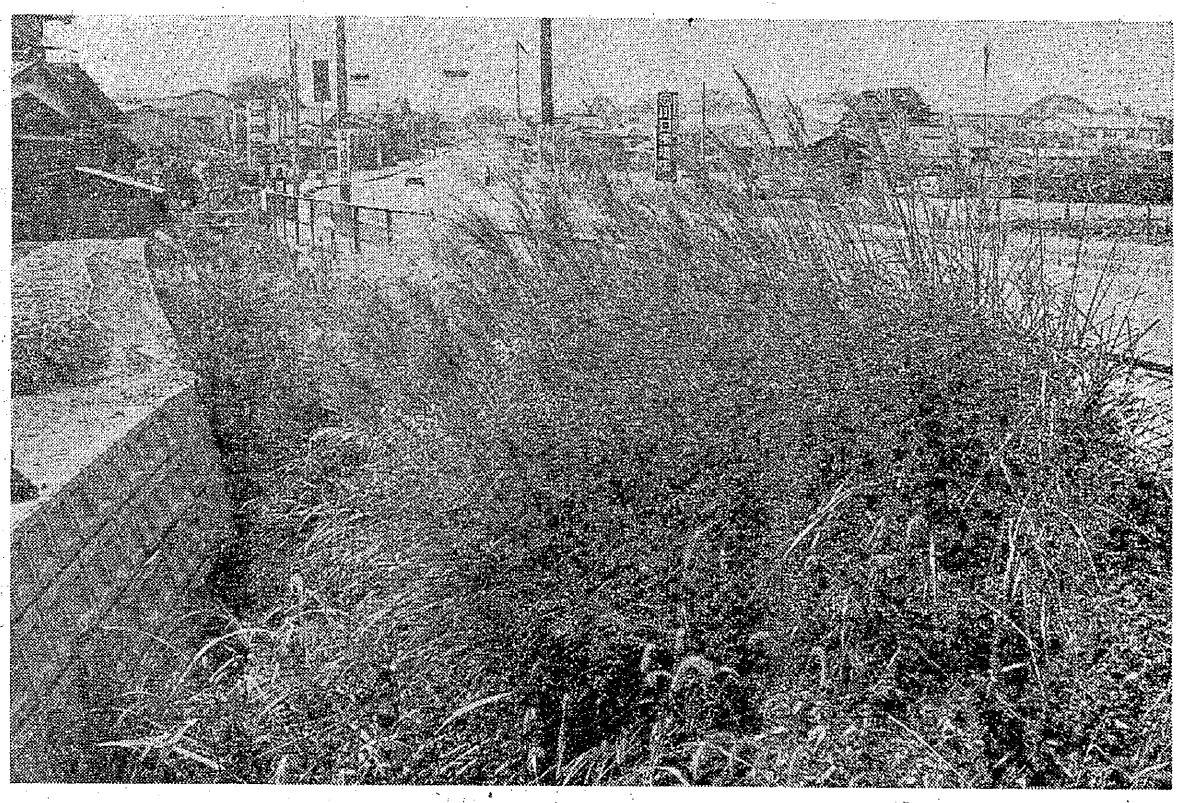

ススキの穂をゆすりながら、涼しい風がどこへともなくわたっていく。秋が、しだいに深まっていく。

今年もやってきた敬老会

元気でご参加下さい

65歳以上のお年寄り歓迎

三池主婦会

三池主婦会は、中央分会長会議を開き、今年もやってきた敬老会の取り組み方をきめました。

三池主婦会は、十月八日第二回中央分会長会議を開いて、いよいよ今年もその季がおとずれた敬老会の取り組み方をきめました。

私たちの運動を日ごろからささえ、はげましてくださっている同居家族のお年寄りへの感謝の気持ちをこめ、暖くお迎えして、ぜひ、楽しい一日を過ごしていただくよう次のようなことをきめました。

一、日時＝十月十七日。

一、ところ＝山鹿簡易保険保養センター。

一、参加者＝組合員と同居する六十五歳以上のおじいちゃんとおばあちゃん。

その日は、荒尾市営バス二台とニュースカー〝はたかぜ〟で、山鹿温泉へまいります。帰りは同センターを午後三時に出発、帰路につくよう計画しておりますから、ぜひお元気でご参加くださるよう、ご案内（各分会長さんを通じ）いたします。

手記

恩師の訪ずれ

CO患者家族　猿渡ハギエ

八月十五日の朝、朝食の箸をとらんとしたところで電話のベルが鳴った。

CO患者の夫は、病院から外泊で帰宅中なので、夫への心配はなかったが、誰かしら、と思いながら受話器をとったら、小学校時代の恩師―女先生の声。よろこびと驚きでいっぱいになりながら、待つこと暫し。

先生は長らくお勤めになられ、唯今は恩給生活中だとか。お子さん達も、それぞれ各地で家庭をもたれ、旅行をかねて訪問される楽しみがある由で、同じように孫がいて、遍歴を過ぎた私も、恩師の前では童心に帰って、甘え心さえ出る始末。

先生の思い出話、私の思い出話と、次から次へと話の花が咲いていく。暮らしてきた時間が長かったし、それに悲しい、残酷なあの戦争を体験した者同志、時のたつのを忘れた位いだった。

時、恰も終戦記念日。昼食を一緒に食べながらテレビを見ていたところ、終戦記念式典が中継されていた。これを見られている先生に私が、「兄が戦死して、女子供ばかりが残って苦労しました。もう戦争はイヤです。繰り返してはならないですね」、と話していると横で、同じく昼食をしていた夫も話の中に加わってきた。

夫は職業軍人ではなく、召集を受けての軍隊生活だった。その五年か六年の軍隊生活の思い出が最近とみに蘇がえってくる夫は、いきいきと戦場の話を始めた。

その夫を見られた恩師は、「具合がよさそうで、よかったね」と、しみじみいわれたのだが、夫の記憶もそれまで。あとは話す言葉の中に、少なからず不分明なところがきわだってきた。

外面を一見しただけでは、被災患者とはわからない夫。私は、夫について恩師に語った。

「症状固定」という口実で、治療を打ち切られたこと。だからといって、治療を一日休めば、一日早く死が近づいてくるような状態のこと。差し当たり、夫を守っていく方法として、健康保険での治療を続けながら、労災法にもとづく治療継続を求めて異議申し立てを行ない、闘っていること。CO中毒症という病気には、もともと全治がないこと、などなど……。

先生は、「幼い頃は、体は大きい方だったが、その存在さえわからない位いおとなしかったのに、あんたも変わったね。こんなにもがんばり屋さんになっているなどとは、想像もできなかった。しょぼんとしているのではないか、と思ったら、これで安心した。が、体に無理をしないようにしておやりなさい」、と注意された。それに対して、私はお答えしました。

「身にふりかかる火の粉は、己れがまず払う努力をしなくては、他の人に応援を頼むわけにはいきません。体をいといながらも、がんばっていきます。三池の労働者らしい姿勢で、やります」

恩師も、早や七十代なかばかと思われますが、こんどのご訪問はたとえようもなくうれしかった。その日、私はさらに、三井と労働省と、闘い続けていくことをお誓いしてお別れしたのだった。

戦争は、決してマンガに出てくるような恰好いいものではない。人間が、人間を殺す残虐非道。それが戦争だ。

労災もまた戦争と同じく、死者に被災患者、遺族を出しては、家族まで不幸につき落とす。戦争、労災のいずれをも、絶対に繰り返してはならない。ごめんだ。

先生、お教えを守って前進していきます。いつまでもお元気でいて下さい。また、お会いできる日を楽しみに。

子供に思うこと

四山福祉二分会　一主婦

新聞やテレビで子供の非行、自殺シンナー遊びなどが伝えられる。そのたびに、そのとしごろの子を持つ親にとって、「またか」と思わずにはいられません。

つい先日のことです。わずか五歳の坊やが、「親から叱られるよりも、死んだ方がいい」と自殺未遂事件を起こしたという新聞記事を読みました。なぜ、あんなにも小さな坊やが死を選ぼうとしたのか、と思うとおどろきでいっぱいです。

私の家には、中学生の息子がいます。親が厳格過ぎてもいけないし、それかといってあまやかし過ぎてもいけないし。子供のしつけはこんなことでいいのかなア、といつも思っています。現在の様子では、「うちの子にかぎって」などといってはおれない時代のことですから。

茶の間では、いうまでもなくテレビが主役になっています。私の家では食事のときだけは、テレビを消して、その日家であったこと、学校であったこと、友達のことなどをお互いに話し合うように、もっぱら親と子の対話の時間にしています。何とか、一日一回は子供のまわりに目を向けるように心をくばっているのですが……。

×

こんなつらい思いは、考えて見ますとだれでも心のなかにもっていることです。どしどしこの欄を通して打ち明け、語り合い、そして子供や孫たちが力強く、美しい心と体をもった人間に育っていくように、がんばりましょう。

この欄へ、どしどし投稿が集まることを願っております。秋もいよいよもみじが照り映えることとなりました。考えるにより、書くによしの季節です。

――編集部

ここにも釣り場が

佐世保、平戸口線（国鉄）の小浦駅下車。ここから車で十分の臼の浦港は、石炭の積み出し港だったのが観光漁業基地に変身した。

石井、喜久屋などの釣りセンターがあり、瀬渡しや貸し舟業もやっている。

臼の浦は九十九島の北と南の境い目で、島また島であり、その間を縫って真珠ダナが海面一パイに浮かぶ。

魚はチヌ、メバル、クロ、イサキ、ボラ、スズキなどなんでも釣れる。

但し、長期抵抗（労働者の闘う根性）が必要です。一度アタックしてみては……。

孫に、一本とられる……

購入したばかりのさつきの植え替えをしているのを、そばでじっと見ていた孫（女の子で、三歳と一カ月）が手を出し始めた。

気づいたときは遅かった、せっかく、角鉢に分けて入れたばかりの土を、手をドロだらけにして出したり入れたり……。

「こげんこつすっと、手が汚れてきたなかろうが……」とがめると、すかさず孫―「じいちゃんは、自分も手をドロだらけにしよってから……」

孫に、一本とられた日だった。

（退職者・斉藤一好記）

買物手帳

まだ疑問の多い食品添加物

まだまだ食品添加物が多量に使われています。よく食べる魚肉ソーセージやハムには、色があせぬようにと亜硝酸ナトリューム（発食剤）、肉らしい色にするためタール系色素（着色料）、甘みをつけるためにサッカリンナトリューム（甘味料）、味つけにグルタミン酸ソーダ、保水のためリン酸塩（品質改良剤）、腐敗を避けるためソルビン酸（保存料）等。

生活協同組合は六〇年代から、不要な添加物を排除したCOOP商品を開発してきました。すでに八百種類を数えるといいます。

（日本生協・連合記事から）

お願い

主婦の皆さん、本紙は別項記事のように、新聞〝みいけ〟をみんなでつくるという考え方のうえから、皆さんのご投稿を歓迎しています。どうか、積極的に原稿をお寄せください。

編集部

こんなマンガを、本紙に書いてください。